

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### Tendencies in Invited Performances of Indonesian Performing Arts during Postwar Japan An Analysis of the Host Organizations

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増田, 久未, Masuda, Kumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1339">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1339</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 戦後日本におけるインドネシア芸能招聘公演の傾向 —主催別分析を軸に—

増田 久未

### 要旨

現在日本国内において、インドネシア芸能の招聘公演はほとんど行われていない。しかしながら、かつては、'70年代半ば頃から自国と相手国との両者の対等な理解を目的とする「相互交流」の潮流が現れたことにより、戦後日本の自国文化の再構築と他国との関係改善に向けた模索が行われた。そうした渦中、インドネシア芸能の紹介を通じた文化交流も始まり、'80年代、'90年代と徐々にその勢いが増していく。当初は文化庁主催の「アジア民族芸能祭」などをはじめとする行政主催のものが中心だったが、毎年のように舞踊団、楽団が招聘されるようになる。

本研究は、上述のような対外文化事業として始められたインドネシア芸能の招聘公演が、歴史的な文脈の中でどのように位置付けられるか、各公演の主催、目的、対象、演目などの分析を通し捉え直すことを目的とする。その第1段階として、本稿では特に1960年～2010年頃までにインドネシアから招聘された楽団による公演の主催者に焦点を当て、収集した各公演のプログラムやチラシ等から得られた公演情報などをもとに年表として整理し、傾向分析を行った。

今回収集した78公演の情報から、主催者に焦点を当て整理した結果、1. '80年代頃までは文化庁や国際交流基金といった行政組織によるものから、民間主催のものが増えていく傾向へと変化する点、2. かつては国と国との間で行われていた国際交流から、個人または民間組織とインドネシアとの関係による交流へと展開する、という大きく2つの傾向が指摘できた。また、'80年代末から起こるワールド・ミュージックブームやバブル経済など、社会的背景がそうした傾向に影響を及ぼしているということも、考察結果として提示した。

## **Tendencies in Invited Performances of Indonesian Performing Arts during Postwar Japan: An Analysis of the Host Organizations**

**Kumi MASUDA**

### **Abstract**

Currently, there are almost no invited performances of Indonesian performing arts in Japan. However, during the mid-1970s, the trend toward “mutual exchange,” which aims at reciprocal understanding between both countries, arose. While Japan was groping for a reconstruction of its own culture and an improvement in its diplomatic relations after World War II, cultural exchange through the introduction of Indonesian performing arts began, and it gradually gained momentum during the 1980s and '90s. Initially, the Japanese government took the initiative in this cultural exchange, as with the Asian Folk Performing Festival sponsored by the Agency for Cultural Affairs. After that, Indonesian dance groups and gamelan orchestras were invited almost every year.

This study attempts to situate in its historical context the performances of Indonesian performing arts in postwar Japan, which seem to have originated as an external cultural project, by analyzing the host organizations, purposes, targets (audiences), and programs. First, this paper focuses on the host organizations for the concerts by performing arts groups invited from Indonesia between 1960 and 2010, then scrutinizes the information obtained from the programs and leaflets of each performance. In addition, I arrange these data in chronological order and apply trend analyses to them.

From the analysis of the 78 performances and their host organizations that I investigated, I found two remarkable tendencies. First, around the 1980s, their main organizers shifted from administrative organizations to private sponsors. Second, international exchange, which depended on the relationship between the countries, was gradually replaced with connections between individuals or private organizations and Indonesia. Additionally, I demonstrate that the societal background, such as the 1980s world music boom and the economic bubble, influenced these tendencies.

# 戦後日本におけるインドネシア芸能招聘公演の傾向

## —主催別分析を軸に—

増田 久未

キーワード：国際文化交流 インドネシア芸能 ガムラン 招聘公演 異文化理解

### 1 はじめに

本研究は、戦後日本においてインドネシア芸能がどのような形で紹介され、広く社会の中で享受されるようになったか、歴史的な文脈から明らかにするものである。インドネシアと日本との国交は戦時下にすでに開かれており、具体的には黒沢隆朝による東南アジア音楽調査、小林一三による蘭印特派使節としてのインドネシア訪問などが挙げられるが(増田 2018: 6-10)、当時は「大東亜共栄圏」という構想のもと、非西欧諸国に対する日本の文化的「優位性」をもった「文化工作」が主たる目的であった(芝崎 1999: 178-183)。そのため当時のインドネシア-日本間の交流は、国家同士の関係改善という趣旨のもと行われてきた戦後の国際交流とは異なっており、いわゆる「文化交流」という姿勢をもった事業は戦後に始まる。第2次世界大戦後の日本は、それまで停止していた国際文化交流を新たに再出発すべく、1946年の国際文化振興会(KBS)の再稼働、1951年のユネスコ加盟などを経て、「文化国家」の再建を図った(大木 2002: 89)。はじめは西欧諸国との文化交流が中心であったが、徐々にアジア諸国との関係構築が重要視されるようになる。武田によれば、当初、「文化交流」とはいえ、その方法及び目的が自国文化の普及と相手国の文化振興への貢献が第一である一方向的なものとなりがちであった(武田 2018: 108-109)。しかしその姿勢は、'70年代半ば頃から徐々に変わりはじめ、「その後の国際文化交流において重要視される、相手国に対して日本文化の理解を促すと同時に相手国の文化を日本側が理解することを目的とした「相互交流」の原型が形成」(同上: 110)された。こうした自国文化の再構築と他国との関係改善に向けた模索が行われる渦中、インドネシア芸能の紹介を通じた文化交流が始まった。'80年代半ば辺りからその勢いは増し、毎年のように舞踊団、楽団が招聘されるようになる。

現在、インドネシア芸能の招聘公演は、ほとんど行われていない。しかしながら、日本には全国各地に約130セットにも上るガムランの楽器が点在しており、大学サークルや民間ガムラングループによりガムランをめぐる活動が行われている(増田 2018: 21-43)。こうした日本人による日本国内におけるガムランの楽器と活動の普及状況を俯瞰すると、過去の度重なる招聘公演による影響が少なからずあると考えられる。本研究は、対外文化事業として始められたインドネシア芸能の招聘公演が、歴史的な文脈の中でどのように位置付けられるか、各公演の主催、目的、対象、演目などの分析を通し捉え直すことを目的とする。招聘公演を重ねていくことによる日本国内におけるインドネシア文化芸能の萌芽、また現在日本各地に点在する楽器とそれを取り巻く活動への影響と波及の状況について、歴史的

経緯も踏まえ明らかにする。

戦後の日本におけるアジアの伝統芸能の紹介を通じた文化交流とその影響に関する研究は福田・加藤(2016)、小川(2017)などにより既になされているが、とりわけインドネシア芸能に焦点化し、その歴史的経緯と公演の状況に関してまとめられた例はこれまでにみられない。本研究では先述のような視点でインドネシア芸能の招聘公演を整理、分析考察することにより、ガムランをとりまく活動の展開の広がり、ガムランをはじめとするインドネシア芸能を日本人がどのように受容し、価値づけてきたか、ということの裏付けにつながるという点で、意義あるものだと考える。その第1段階として、本稿では特に公演主催者に焦点を当て、収集した情報を整理し、考察を行う。

研究の対象は、1960年～2010年頃までにインドネシアから招聘された楽団による公演とする<sup>(1)</sup>。研究方法として、まず、各公演のプログラムやチラシ等を収集し<sup>(2)</sup>、そこから得られた公演情報などをもとに年表として整理した。その年表をもとに分析観点を設定し、傾向を分析する。

## 2 主催者別を中心とした年表整理

戦後日本における芸術の再構築に向けた動きは、早くも敗戦の翌年である1946年に開催された文化庁主催芸術祭にはじまる。予算が無い中で大勢の芸術関係者の協力により、「伝統的な芸術と、近代にヨーロッパの芸術から影響を受けて始まった芸術が、まったく同じレベルで結集するかたちで始まった」(小島 1995: 400)この一大イベントは、昭和、平成、そして令和となった現在に至るまで定期的で開催される芸術の祭典となるわけだが、西欧と日本伝統芸能との交流のみならず、その交流の輪はアジア諸国へと展開し、インドネシアからも芸能団体を招聘するようになる。その一つの契機とも言える「アジア民族芸能祭」をはじめとする招聘公演の流れを中心として、インドネシア芸能の広がりを各公演の主催に焦点化し、行政(国)主催と民間主催とに大きく分け、次に見ていきたい。

### 2-1 行政主催

#### 2-1-1 国及び関連機関

表1 文化庁芸術祭関連

年	公演名	主催	招聘団体
1968	第1回アジア民族芸能祭	文化庁芸術祭執行委員会、NHK、日本青年館との共催	ガムラン音楽舞踊団 (21名)

<sup>(1)</sup> 現時点で78公演の情報が収集できたため、今回はその情報をもとに整理を行う。基本的に1~2人のみの招聘は対象外とし、「楽団」「舞踊団」と呼べる最小遂行人数の団体を主とする。例えば、トゥンバン・スングのようなもともと少人数で行う芸能は対象に含める。

<sup>(2)</sup> 公演プログラム、チラシに関しては、一般的に図書館などで閲覧できるものはほとんどないため、その公演の開催にスタッフなどで携わった人、あるいは観客として足を運んだ人を頼りに調査を進める必要があった。今回の調査では、中坪功雄氏、中野亜弓氏、宮元雪絵氏、針生すぐり氏の協力を得ることが可能となったため、今回対象としている資料は上述4名の私物となる公演プログラム、チラシが元となっている。また、今回収集された資料は、戦後日本におけるインドネシア芸能招聘公演の全数のどれだけを占めているのかについては、他の研究者による調査の前例が見当たらないため、特定できないこともここに付言する。

1975	芸術祭 30 周年記念事業 第 2 回「アジア民族芸能祭」	文化庁芸術祭執行委員会、NHK、NHK サービスセンター	プリ・プムチュタン 舞踊団
1979	第 3 回日本民謡まつり	文化庁	スンダ地方の民謡
1985	第 3 回アジア民族芸能祭	文化庁、NHK、国際交流基金、国立劇場	プリアタン歌舞団 (48 名)
1988	第 12 回日本民謡まつり アジア・太平洋うたとおどりの祭典	文化庁／国際交流基金	ロンボク島の歌と踊り

表1にみる各公演は、主に文化庁主催の芸術祭に関連づけて NHK や国際交流基金も加わる形で行われてきた。1968年の「アジア民族芸能祭」は、明治百年を記念する特別公演として、それまで文化交流の薄かったアジア諸国を招き、インド、タイ、インドネシア、フィリピン、中国、日本の6カ国の芸能が一堂に会し、各国の芸能を披露するものとなった。アジア諸国が同じ舞台上で各々の芸能を通し交流を行ったのはおそらくこれが初めてのことであり、参加各国もこうした機会が持てたことを非常に喜び、以降も毎年持ち回りで芸能祭を継続しようという話も出ていた<sup>(3)</sup>。

好評を博したこの「アジア民族芸能祭」は、7年後の1975年、芸術祭30周年および NHK 放送開始50周年を記念する年に第2回を開催することとなる。この年は中国は不参加であったが、第1回目に直前になり来日できなくなった韓国も交え、また新たにマレーシア、ミャンマーも加わり、日本を含め8カ国による上演と、さらに規模も大きくなる。第3回は10年後となる1985年、芸術祭40周年、放送開始60周年の記念事業として、韓国、バングラデシュ、トルコ、マレーシア、中国、インド、スリランカ、インドネシア、日本という顔ぶれで開催され、インドネシアからはバリ島プリアタン歌舞団が初来日している。

このように、「60年代終盤～80年代半ばにかけて3回にわたり開催された「アジア民族芸能祭」では、毎回インドネシアの芸能が招聘されていた。芸術祭に関連する特別公演としてこのような大規模な催しでその芸能を目にする機会は、その他に「日本民謡まつり」、「アジア・太平洋うたとおどりの祭典」などが挙げられる。「日本民謡まつり」は、民謡の持つ美しさや価値を一般に広く認知させることを目的として、1977年からはじめられる。この公演の特色は、民謡に特化した舞台であるということに加え、第1回目から毎回必ずアジアの芸能を招聘していることである。日本と同じようにアジア諸国の民俗芸能にも見られる、人々の生活の中でうたいつがれてきた民謡を紹介することで、相互関連の発見からアジア諸国との文化交流につながることを期待し、参加を依頼するに至った(高橋 1985a: 4)。第1回公演のイラン・イラク、第2回公演のトルコ・韓国に続き、第3回公演にはインドネシアとスリランカが出演した。

また、「日本民謡まつり」は1987年第12回公演から、「アジア・太平洋うたとおどりの祭典」という名称がメイン・タイトルとして用いられるようになる。第11回のニュージーランドのマオリの歌と踊り、ネパールの仮面舞踊に続く第12回で、太平洋地域から招かれたキリバスとともに、アジアからはインドネシア・ロンボク島の歌と踊りが招聘される。

<sup>(3)</sup> 「アジア民族芸能祭」『芸能』10/12, 1968, 7.

表2 国際交流基金主催

年	公演名	主催	招聘団体
1976	第1回アジア伝統芸能の交流(ATPA)	国際交流基金/国立劇場	西ジャワスンダ地方のアンサンブル
1982	楽舞夢幻 インドネシア・バリ島ダルマ・サンティ舞踊団	国際交流基金	ダルマ・サンティ舞踊団
1991	インドネシア仮面舞踊劇「トペン・マドゥラ」	国際交流基金アセアン文化センター	東ジャワ・マドゥラ島舞踊家、演奏家
1999	インドネシア舞踊公演 旅する舞人～伝統から現代へ～	国際交流基金アジアセンター	ラシナ・グループ、ミロト&ダンスーズ

表3 独立行政法人

1995	国立劇場7月特別企画公演「胡弓Ⅱ」	独立行政法人日本芸術文化振興会 <sup>(4)</sup>	インドネシア・ジャワのガドン
2002	平成14年度舞台芸術国際フェスティバル 胡弓で結ぶアジアの音楽	独立行政法人日本芸術文化振興会	サプトブドヨ

表1にみる公演はいずれも文化庁が主催とする芸術祭に関連する事業であるが、そのほかの主催者が行政に関わるものを表2、表3に挙げる。

1976年、国際交流基金および国立劇場主催のもと、「アジア伝統芸能の交流(ATPA)」が開始された。このプロジェクトは、アジア各国から招かれた研究者及び演奏家たちとの共同研究、演奏を通じた交流を主たる目的とし、ディスカッション、記録、研究を行うセッションと公演で構成された内容で、1987年まで5回にわたり開催され、第1回にはインドネシア・スンダ地方から演奏家を招き上演された。同じく国際交流基金主催の公演として、1982年「楽舞夢幻～」も同様だが、行政関係主催のものとしては初めてインドネシアに特化した招聘公演である。また、1991年「トペン・マドゥラ」、1999「旅する舞人」も同じく国際交流基金主催で、前者はマドゥラ島の仮面舞踊とガムラン、後者はチルボンの舞踊家、演奏家を招聘した舞台となっており、両者ともインドネシアの芸能のみを取り上げた上演である。

また、表3に挙げる独立行政法人に関しては、2つの公演両者とも日本の胡弓に関連づけてインドネシアの音楽を取り上げ、国立劇場で開催されているという点で興味深い。アジアの音楽として、音楽文化の共通性を見出し、紹介するという姿勢が、両者の公演にも見られると言える。

<sup>(4)</sup> 国立劇場法の一部改正、独立行政法人日本芸術文化振興会法の公布などを経て、2003年、特殊法人国立劇場から独立行政法人日本芸術文化振興会となる。<https://www.ntj.jac.go.jp/about/introduction.html>

2-1-2 地方自治体および財団法人（公的）<sup>(5)</sup>

表4 地方自治体

	公演名	主催	招聘団体
1988	アジア民族芸能祭いしがき	石垣市	プリアタン歌舞団ティルタサリ
1991	アジア民族芸能祭いしがき	石垣市	インドネシア西ジャワトペンババカン
1992	大垣ルネッサンス「代々の雅」、土取利行コラボレーション	大垣ルネッサンス「代々の雅」事業推進協議会、夏青野原・虹の楽殿実行委員会	スラカルタ・インドネシア芸術学院舞楽団 (STSI)
1993	第8回国民文化祭いわて'93	岩手県	スアール・アグン
1997	タガス・グヌン・ジャティ歌舞団公演	えずこホール（仙南芸術文化センター） <sup>(6)</sup>	タガス・グヌン・ジャティ歌舞団
2003、 2004	ジェゴグ公演	熊本市国際交流振興事業団? <sup>(7)</sup>	ジンバルワナジェゴグダンスチーム?

表5 財団法人（公的）

年	公演名	主催	招聘団体
1970	大阪万国博覧会アジアの祭り	財団法人日本万国博覧会協会	インドネシア国立古典舞踊団
1984	ワヤン・クリ ジャワの影絵とガムラン光影夢幻	武蔵野文化事業団 <sup>(8)</sup>	アノム・スロト、ガムラン演奏家（7名）
1985	こどもの城オープニング記念 ダマルウラン	財団法人日本児童手当協会	ジャワ舞踊家、演奏家
1986	こどもの城開館1周年記念ガムラン金香花頌	財団法人日本児童手当協会	グントラ・マディヤ（7名）、踊り手、奏者（3名）
1992	スマララティ歌舞団	公益財団法人日本青少年文化センター	スマララティ歌舞団
2004	御堂筋パレード[ジェゴグ]	公益財団法人大阪21世紀協会	ジンバルワナジェゴグダンスチーム

表4には地方自治体が主体となり開催していると判別できるもの、表5には公的事業を目的としている財団法人主催の公演をそれぞれ年表にしている。

この表で最も時代を遡る1970年に開催された大阪万国博覧会では、インドネシア国立古

<sup>(5)</sup> 本稿ではあくまでも組織の成り立ちや活動目的に基づき、それが公的なものか私的なものかを判断しているため、公的なものと民間とに分類している。

<sup>(6)</sup> 複数の市町村により構成される仙南地域広域行政事務組合による管理、運営。

<sup>(7)</sup> 山田（2011）を参照しているが、明確な情報が掲載されていないため、正確な主催者および招聘団体は調査途中である。

<sup>(8)</sup> 公益法人制度の改正に伴い、現在公益財団法人武蔵野文化事業団となっている。

典舞踊団が来日し、お祭り広場などでバリ島やジャワ島の伝統舞踊や音楽が披露された。大阪万博は予算規模も大きく、様々な国の文化がパビリオンの中で紹介されており、そうした大規模なイベント会場のなかの一部としてインドネシア館が位置づけられていた。なかでもお祭り広場で行われる「アジアのまつり」は、日本を含む10カ国の舞踊団が一堂に会し、総勢324人にも上る出演者によって行われたものであったことは、特筆に値するだろう。

「アジア民族芸能祭いしがき」は、沖縄県石垣市において、市制施行40周年を迎えた1987年から石垣市主催で開催されているイベントであり、1988年の第2回公演、1991年の第5回で前者ではバリ島の楽団ティルタサリ、後者は西ジャワの仮面舞踊団が招聘されている。表3、表4では、「アジア民族芸能祭いしがき」のほか、「国民文化祭いわて」「御堂筋パレード」など、その土地の民俗芸能との比較対象として、自治体や地元法人主催の地域のお祭りでインドネシア芸能が紹介される例が多くみられる。これらの事例は、先述の文化庁芸術祭や省庁管轄の興行にみる、様々なアジアの芸能の中の一つとしてインドネシアの芸能を紹介するという目的に近い形で開催されていたと考えられる。そのほか、こどもの城オープニング記念や1周年記念行事での特別招聘など、特別行事、記念行事開催のために招聘される傾向がある。

## 2-2 民間、その他主催

次に、民間の主催公演に焦点化し、組織体系の種別として大きく「民間企業・財団法人（民間）・その他民間組織」「実行委員会・その他」に分類し、年代別に整理する。

### 2-2-1 民間企業・財団法人（民間）・その他民間組織

表6 民間企業

年	公演名	主催	招聘団体
1986	サダ・ブダヤ歌舞団ガムラン公演	ラフォーレ原宿	サダ・ブダヤ歌舞団
	異界の仮面神戯 バリの仮面劇 トペン・パジェガン	ラフォーレ原宿	イ・クトゥ・カントール他、9名
91, 94-06, 08, 2010	スアール・アグン来日公演	株式会社カンバセーションアンドカムパニー(大多数)	スアール・アグン
1999	朝日新聞創刊 120周年記念公演 アジアの風 ジャワのワヤン・クリ/ジャワ宮廷音楽の昇華	朝日新聞社	キ・クスデ・カストラモノ/サプトブドヨ
2000	ジャワガムラン精霊の楽舞	朝日新聞社	サプトブドヨ

表7 財団法人（民間）・その他民間組織

年	公演名	主催	招聘団体
1973	ジョグジャカルタ王立舞踊団公演	財団法人民主音楽協会	ジョグジャカルタ王立舞踊団
1994	楽舞悠久ジャワ宮廷ガムラン・舞踊の精華	学校法人昭和女子大学、他	インドネシア国立ヨグヤカルタ総合芸術大学
1995	ソロ・スロカルト王家のガムランと舞踊 クラトンの夢と伝説	財団法人ニッセイ文化財団、朝日新聞社	スロカルト王家演奏家・舞踊家（40名）
	国際児童フェスティバル「バリ島のこどもの踊りとガムラン」	財団法人ニッセイ文化振興財団	プリンティング・マスの《スカル・プムダ》
1998	絢爛のスーパーガムラン ヤマサリ日本公演	チプタ・ブダヤ・バリ財団日本代表部等	ヤマサリ
2004	高知魅惑のバリ島ジェゴグ	NPO 法人高知龍馬の会	（来日ジェゴグ楽団） <sup>(9)</sup>

民間企業が主催となる公演は、朝日新聞社主催「バリ美術とパフォーマンス展」関連事業として開催された「サダ・ブダヤ歌舞団」に始まる。招聘人数はこの時よりも少数となるが、ラフォーレ原宿主催のバリ舞踊とガムランの公演は、同年1986年にもう一度開催されている。同じくバリ島のジェゴグという竹のアンサンブル演奏団体として、スアール・アグンという特定のグループが、1991年から2010年までの約20年間ほぼ毎年、ほとんどの公演で株式会社カンバセーションアンドカムパニー<sup>(10)</sup>によって招聘されていることは、特筆すべきであろう。また、1999年と2000年の2度にわたり、朝日新聞がサプト・ブドヨを招聘している。

財団法人が主催として関わっている公演は、ここに挙げた表から主に‘90年代に多くあることがわかる。1973年財団法人民主音楽協会主催の公演はこの中で最も古いものになるが、ジョグジャカルタ王立舞踊団を招き、東京厚生記念会館をはじめ全国各地で20公演行われた。<sup>(11)</sup> ‘90年代に入ると、ニッセイ文化振興財団が1995年に2度にわたり、一方ではインドネシア共和国建国50周年を記念しインドネシア・スロカルト王家の楽団・舞踊団40名を招聘、他方ではバリ島の子供の楽団を招聘している。チプタ・ブダヤ・バリ財団日本代表部は、「ヤマサリ日本公演」に限らず他にも共催などで多数の公演に関わっている。そのほか学校法人では唯一昭和女子大学が挙げられ、同大学の人見記念講堂が公演会場となっている。人見記念講堂は、1997年日本友好祭のダルマ・サンティ舞踊団、ジャワ・スロカルト王家のガムランと舞踊の公演会場にもなっている。

このように、表7における民間事業を目的の主軸とする財団法人の場合は、大規模な公演を単発で打つ傾向にあるのに対し、表6のカンバセーションアンドカムパニーのように、

<sup>(9)</sup> 正確な招聘団体は調査途中である。

<sup>(10)</sup> 2010年12月20日をもって業務停止となっている（山田 2010: 248）。

<sup>(11)</sup> 当時スタッフとして関わっていた中坪功雄によると、過去他に類がないほどの多くの楽器を使用した大規模な公演だったという。

一つの企業が同一の楽団を定期的に招聘し定着化を図ろうとする例もあることが判明した。

## 2-2-2 実行委員会・その他

表8 実行委員会

年	公演名	主催	招聘団体
1988 1990	バリ島プリアタン歌舞団 「ティルタ・サリ」	ティルタ・サリ日本公演実行 委員会、他	バリ島プリアタン歌舞団 「ティルタ・サリ」
1992	東南アジア祭'92	東南アジア祭'92 実行委員会、 他	バリ島子供ガムラン「トゥ ドゥン・アグン」他
1993	サラスワティ舞踊団来日 公演	バリ島舞踊とガムラン音楽の 集い実行委員会	サラスワティ舞踊団
1994	ケチャ日本公演'94	ケチャ日本公演実行委員会/ 株式会社アクション・リサー チ	バリ島プリアタン村スマラ マドヤ (100名)
	小泉文夫記念音楽会 ア ジアの響き	小泉文夫記念音楽会実行委員 会	チュルンブンガン
1996	スマラ・ラティ歌舞団日本 公演 桜の花とともに	スマラ・ラティ歌舞団日本公 演実行委員会他	スマラ・ラティ 歌舞団
	超絶のガムラン ヤマサ リ日本公演	ヤマサリ日本公演実行委員会 他	ヤマサリ
1997	ダルマ・サンティ舞踊団公 演	インドネシア・日本友好祭'97 イン・いわて実行委員会、他	ダルマ・サンティ舞踊団
2003	ジェゴグ九州公演	アサヒワールドカルチャーキ ャラバン実行委員会、他	ジンバルワナジェゴグダン スチーム?
2004	アジアフュージョンカー ニバル	アサヒワールドカルチャー キャラバン実行委員会	ジンバルワナジェゴグダ ンスチーム
	第2回おかやま県民文化 祭「ジェゴグ」コンサート	岡山市とバリ・ジュンブラナ との文化芸術交流「ジェゴグ コンサート」実行委員会	(来日ジェゴグ楽団) <sup>(12)</sup>
2005	三次きんさいまつり	三次きんさい祭実行委員会	(来日ジェゴグ楽団) <sup>(13)</sup>
2008-2010	ひろしまフラワーフェス ティバル	ひろしまフラワーフェスティ バル実行委員会	ジュンブラナ県の中学生た ち

実行委員会組織に関しては、東南アジア祭'92実行委員会のような行政主体で協働組織となっているものや、ティルタ・サリ実行委員会、ケチャ日本公演実行委員会、ヤマサリ実行委員会のように、開催地域行政や法人企業の重役およびその他公演関係者によって構成されている大規模な組織、またバリ島舞踊とガムラン音楽の集い実行委員会、小泉文夫記

(12) (9)に同じ。

(13) 同上。

念音楽会実行委員会、スマラ・ラティ歌舞団日本公演実行委員会のように、個人とその他関係者の有志によるものもある。ひろしまフラワーフェスティバルでは、2008年から3年にわたりバリ島ジュンブラナ県の中学生たちを招き、ジェゴグの演奏や舞踊を披露している。このイベントの招聘には、在広島市のインドネシア人が経営する株式会社ラスナバリが関わっている<sup>(14)</sup>。また、2000年以降は地域の文化祭や祭りへの出演目的で招聘されることが比較的多い傾向にあることも、表7から明らかとなる。

表9 協会・研究会

年	公演名	主催	招聘団体
1987, 89-92	タガス・グヌン・ジャティ歌舞団公演	日本インドネシア学生友好協会 <sup>(15)</sup>	タガス・グヌン・ジャティ歌舞団
1993	バリ島ブレレン・テジャクラ歌舞団公演	日本インドネシア学生友好協会	ブレレン・テジャクラ歌舞団 (40名)
1997	インドネシア・日本友好祭'97 ジャワ・スロカルト王家のガムランと舞踊	インドネシア音楽舞踊協会他	スロカルト王家演奏家・舞踊家 (40名)
2003	トゥンバン・スنداを聴く	バリ芸能研究会、他	トゥンバン・スندا演奏家 (4名)
2008	ジョゲツ・ピンギタン	バリ芸能研究会	ニ・クトウット・チュニック、他 (8名)

日本インドネシア学生友好協会は、「文化・芸術・スポーツなど、あらゆる分野での活動を通じ、日本とインドネシアの青年、学生により両国の親善と文化交流を図ることを目的として」<sup>(16)</sup>1981年に設立した組織であるが、1987年から5回にわたりタガス・グヌン・ジャティ歌舞団を招き、増上寺や東京本願寺などで上演している。日本インドネシア学生友好協会は、旅行代理店と連携しており、各公演で特別ツアーを組み、バリ島旅行の宣伝に力を入れているようである。インドネシア音楽舞踊協会、バリ芸能研究会に関しては、個人または有志により立ち上げられたと思われる組織であり、限られた資金の中で招聘に尽力している例としてここに挙げられるだろう。

<sup>(14)</sup> 2010年からは、広島大学附属東雲中学校がインドネシアジュンブラナ県ムンドヨ4中学校と姉妹校提携を結び交流活動を始めたことから、ムンドヨ4中学校から中学生が来日しフラワーフェスティバルに参加しているが、同学生たちが演奏や舞踊を披露していたのか事実関係は不明。

<sup>(15)</sup> 1992年より「日本インドネシア友好協会」と名称が変わる。

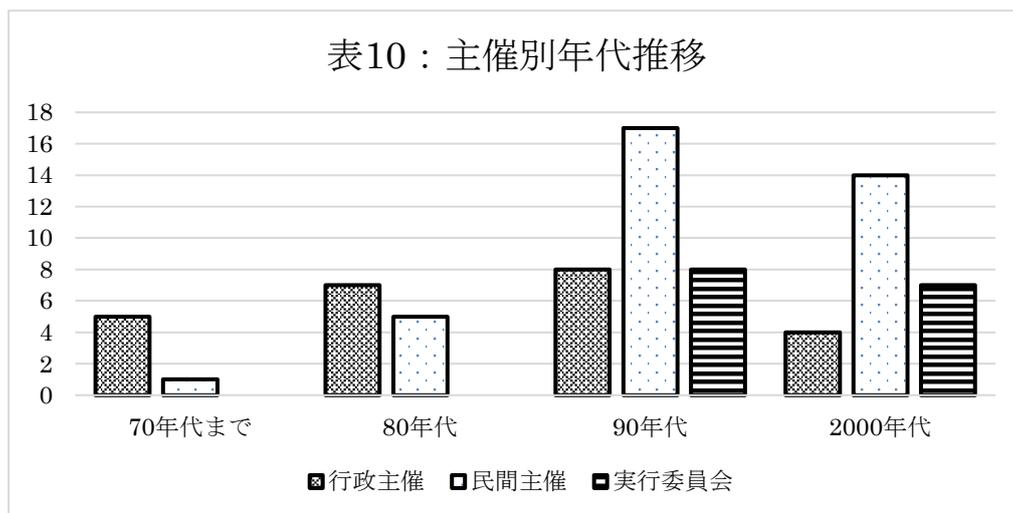
<sup>(16)</sup> 「バリ島プリアタン タガス・グヌン・ジャティ歌舞団+サルドノ+YAS-KAZ 日本公演」1987年公演プログラム、p2。

表10 日本人ガムラン演奏グループ

年	公演名	主催	招聘団体
1984	ガムラン 香る花たちの瞑舞	ランバンサリ	サブトノ、ジャワ・ソロ王家の王女たち（舞踊4名）
2009	ジャワ・舞踊とガムランの宇宙 サスミント・マルドウォォ舞踊団	カルティカ&クスモ	サスミント・マルドウォォ舞踊団

表9に挙げた例は、普段は日本人のみで構成される演奏グループが、演奏家や舞踊団をインドネシアから招聘しているものである。この2つの公演はいずれも、招聘演奏家、舞踊家と日本人ガムラン演奏家、舞踊家とが共に一つの舞台を作るという日本・インドネシア合同公演である<sup>(17)</sup>。日本国内のガムラングループは、多くが営利目的ではない有志の団体であるため、表8と同様限られた資金で協賛金等を募り招聘・公演開催をしていると考えられる。

### 3 傾向分析



以上、招聘公演の主催別に整理したものをもとに、年代別にグラフにすると、表10のような推移を表すことができる。この表をみると、さらに別の観点としてその歴史的な流れによる様々な影響を汲み取ることができる。表10のグラフからは、一つの大きな流れとして、主催が‘80年代頃までは文化庁や国際交流基金といった行政組織によるものから、民間主催のものが増えていく傾向へと変化していったということがわかる。

本稿では、日本において過去に開催されたインドネシア芸能の招聘公演を、主催者を中心として分析し、傾向を探った。今回は収集された公演情報の全体の一部のみを取り上げ、分析を行った結果を提示したにすぎないが、一部に絞りみていくことで、以下のような3

<sup>(17)</sup> 表4の1984年ワヤン・クリ及び1985年こどもの城オープン記念演奏も日本人・インドネシア人の合同公演となっている。

点の傾向が浮き彫りとなった。

### ① インドネシアとの関係の広がり

冒頭でも述べたように、日本とインドネシアとの文化を通じた交流は、敗戦後の日本の「文化国家」再建を目指す中で、徐々にアジア諸国との関係の構築を重視する流れから本格的に始まった。当初は「アジア民族芸能祭」や「アジア伝統芸能の交流」、「日本民謡まつり」などで、日本に古くから伝わる芸能との比較、アジアの中の一つとしての芸能の紹介といった目的でインドネシアの芸能を紹介した。そこには、アジアのなかの日本を再確認すること、隣人の文化を知り比較することで、自文化を改めて知るという、「自文化理解」という目的があった。西欧にばかり目が向き「隣人」の文化を忘れがちである日本人に、自分たちの「源流」がどこにあったのか、再びその心を喚び起させることが求められていた。

しかし、このようにアジアの他国と並列させたインドネシアの芸能の紹介の形が中心だったのは1985年ごろまでで、その後はあくまでもインドネシアの、招聘された団体と彼らの演奏を日本に紹介する形態が中心となる。こうした公演形態の変化の要因として、第1に、先にも述べたように主催が行政から民間へと移行したことが考えられる。前述した「アジア民族芸能祭」などアジア諸国の芸能が一堂に会するような大規模な公演は、莫大な資金と人材が必要となることが想定されることから、行政組織でなければ実現不可能であろう。一方で、民間組織が、インドネシアの芸能団体との関係を構築し、1つの団体を招き上演する、という方法が定着していくが、おそらくそれだけでも40人ほどの大所帯となると、中心となる主催者が、他の組織にも協力を依頼し、スポンサーをつけた上でようやく公演が成立する。また、民間組織の中には、法人企業だけでなく、有志でカンパなどを募って演奏家を招聘していると推測されるような例もみられる。このような公演形態の変化は、両国の行政を主導とした国際交流にとどまらず、個人または民間組織とインドネシアとの関係が構築されていることの表れでもあると言えよう。

### ② 「自文化理解」という目的の変化

第2に、「自文化理解」から「異文化理解」へ、という目的の変化がみられる。前述した行政主催公演が開催された1970年代は、東京芸術大学にジャワ島のガムラン一式が導入され、民族音楽学を学ぶ学生たちを中心にガムランを中心としたインドネシア芸能の研究を開始した時代である。この頃から'80年代～'90年代にかけて音楽大学を中心に、ガムランの楽器が導入され、授業や学生サークルで学生たちが演奏技術を高めていった。つまり、日本の芸能との比較よりも、ガムランと舞踊を中心としたインドネシアの芸能そのものに興味をもつ人々が増えていったのである。この時代にインドネシア芸能を本格的に学んだ人々が、'80年代後半～'90年代の招聘公演に関わり、招聘の仲介や、演目解説に携わっていた様子もみられる。

こうした流れ、目的の変化は、現在日本各地に点在するガムランをめぐる活動現場を振り返ると、「インドネシアの伝統音楽であるガムランの演奏」を活動目的として掲げる日本人によるガムラン演奏団体が多数あることと関連すると考えられる。現地から招聘されたインドネシア芸能団体を間近で見て、その演奏に触発され、彼らが上演する芸能そのもの

を知り、自ら演奏することを目指す活動が展開されていったと考えられるだろう。こうして徐々に日本人のガムラングループによる演奏も増え、インドネシア人による特別な公演でなくともガムランの演奏を聴くことができる機会が多くなる。このことは、やや論旨が飛躍するが、当初、招聘公演を通じた国際交流の一つの目的として掲げられた「自文化理解」の要素がかなり薄れてしまったという傾向を表しているとも考えられるのではないだろうか。

### ③ 社会的背景にみるインドネシア芸能の広がり

加えて、以上のような傾向へと向かった要因の一つとして、'80年代末に始まるワールド・ミュージックブームが考え得るだろう。それまで専門家など一部の人々にしか知られていなかった「非西洋」の音楽が、ワールド・ミュージックとして音楽産業によって積極的に紹介され始めたのを契機に、一般の人々にも広く知られるようになる(北中 2007: 237)。こうした潮流がみられることにより、インドネシアから来日する演奏家の上演への一般の人々の興味関心をより駆り立てることとなったと考えられる。また、音楽業界に限らず、80年後半~90年初頭に起きるバブル経済、'90年代のインターネットの開始による情報化社会の到来なども、インドネシア芸能の日本社会への広がりにも大きく影響していたと考える。

## 4 おわりに

今回はあくまでも招聘公演の主催を中心として整理し、その傾向を分析するにとどまったが、まず全体の流れを俯瞰することで以上のような傾向が指摘できたことは、戦後日本における文化を通じたインドネシアとの交流関係の構築を明らかにするための一つの過程として、次に挙げるような今後に向けたさらなる情報整理、考察の方向性を定めたという点で、極めて示唆的であると考えられる。

今後の課題として、今回手に入れることのできなかったその他の過去の公演情報を引き続き収集することは無論であるが、それに加えて公演の主催だけでなく、招聘されたインドネシア芸能団体や、公演内容、演目、それに伴うインドネシア芸能の分野等も同様に整理する必要がある。現時点でインドネシア国内各地に様々な芸能がある中でも、バリ島の音楽と舞踊が最も多いと予想しているが、他の地域も含めて統計をとり、傾向を分析する。さらに各公演でどのような組織、人物が主に関わって招聘するに至ったのか、インタビューなどを通じて可能な範囲で詳細調査と分析を行う。すでに民間主催組織により、同一の招聘団体が定期的に公演を行うなど、招聘公演の継続性も見えてきているが、特に民間主催に関与するキーパーソンが、どのような目的をもって、インドネシアのみならず国内でどのような人脈を作り公演の定着を目指していたのか、引き続き調査を行う。また、公演が開催された時代の国内の政策や組織の動きも考慮にいれ、招聘公演の展開が歴史的な流れの中でどのように捉えられるのかを考察することも必須である。

以上のような視点で分析、調査を続けることを課題として、その結果を、日本国内におけるガムランの楽器とそれをめぐる活動の展開とどのように関連するかも考察し、最終的には、「日本人がガムランに対しどのような価値形成をしてきたか」を明らかにすることを目指す。もはや招聘公演は「インドネシア-日本」という国単位の文化交流にとどまらず、

「組織-組織」あるいは「個人-個人」という単位での文化交流により展開されるという観点から、こうした文化交流が日本人のガムラン、インドネシア舞踊の受容とそれに対する価値形成にどのように関与していくのか、さらに考察を続けることとする。

謝辞：本稿を執筆するにあたり、公演プログラム等貴重資料及び公演に関わる情報をご提供いただいた中坪功雄氏、中野亜弓氏、宮元雪絵氏、針生すぐり氏にお礼を申し上げますとともに、ここに深い感謝の意を記す。

## 参考文献

### 〔論文、書籍、雑誌記事〕

- 井野辺 潔  
1969 「アジア民族芸能祭」『演劇界』27/1, 104.
- 石垣 博孝  
1999 「アジア民族芸能祭から国際民族芸能祭へ」『文化庁月報』2/365, 17-19.
- 大木 裕子  
2002 「戦後日本の芸術分野における国際文化交流」『文化経済学』3/2, 87-96.
- 小川 恵祐  
2017 『『アジア伝統芸能の交流 (ATPA)』プロジェクトの研究—その日本での劇場公演制作に関わった人々の役割の互換、創造性、挑戦に注目して—』沖縄県立芸術大学修士論文.
- 北中 正和  
2007 「20世紀音楽史 世界音楽の精神あるいは創造と変化」徳丸吉彦/高橋悠治/北中正和/渡辺裕 編 『事典 世界音楽の本』(東京: 岩波書店) 236-237.
- 小泉 文夫  
1976a 「アジア民族芸能祭」『芸術祭三十年史』(東京: 文化庁) 210-212.  
1976b 「アジア伝統音楽の交流 セミナーと公演を終えて」1976年4月12日朝日新聞夕刊, 5.
- 小島 美子  
1995 「日本をみる眼を開いた芸術祭—芸能の国際交流の意味—」『戦後日本の芸術文化史 芸術祭五十年』(東京: ぎょうせい) 400-412.
- 芝崎 厚士  
1999 『近代日本と国際文化交流—国際文化振興会の創設と展開—』(東京: 有信堂)
- 武田 康孝  
2018 「国際文化交流と文化外交—『アジア』の文化理解を一例として」『文化政策の現在2 拡張する文化政策』(東京: 東京大学出版会) 107-128.
- 田村 史  
1983 「ガムラン [楽舞夢幻]」『音楽芸術』41/1, 音楽之友社, 25.
- 高橋 秀雄  
1980 「第四回日本民謡まつり」『季刊邦楽』25, 10-15.  
1981 「日本民謡まつりの歩み ふるさとを唄う祭典」『月刊文化財』文化庁文化財

- 部監修 216, 16-21.
- 1985a 「『日本民謡まつり』に彩りをそえたアジアの芸能」『月刊文化財』文化庁文化財部監修 264, 4-9.
- 1985b 「アジア民族芸能祭」『芸能』27/8, 30-31.
- 東海 晴海 a.o. 編
- 1999 「マンダラ翁の語り (1951-1986) —世界を巡る」『踊る島バリ 聞き書きバリ島のガムラン奏者と踊り手たち』(東京: 株式会社パルコ) 216-247
- 福田 一平
- 1995 「民族舞踊そのほか」『戦後日本の芸術文化史 芸術祭五十年』(東京: ぎょうせい) 413-430.
- 福田 裕美、加藤 富美子
- 2016 「1960～70年代のアジアの伝統芸能との出会い—民俗芸能公演と音楽教育の視点から—」『東京音楽大学研究紀要』39, 29-52.
- 増田 久未
- 2018 「日本におけるガムランの活動に関する一考察—その変遷と現状分析をもとに—」東京音楽大学修士論文.
- 北條 明直
- 1976 「第二十三回芸術祭」『芸術祭三十年史』(東京: 文化庁) 73-78.
- 本田 安次
- 1976 「民俗芸能の公開と保存」『芸術祭三十年史』(東京: 文化庁) 206-209.
- 1985a 「アジア民族芸能祭・全国青年大会の郷土芸能」『芸能』27/12, 7.
- 1985b 「日本民謡まつり・全国民俗芸能大会・アジア民族芸能祭の動向」『季刊邦楽』42, 48-49.
- 茂手木 潔子
- 1985 「バリ島プリアタン歌舞団1985」『音楽芸術』43/11, 5-9.
- 宮尾 慈良
- 1992 「アジア舞踊の研究動向—1970年代から1980年代(東南アジア編)」『舞踊學』1992/14, 20-22.
- 山田 さよ子
- 2011 「日本におけるジェゴグ」『表現文化研究』10/2, 247-256.

**[雑誌記事 (著者不明)]**

- 「アジア民族芸能祭」『芸能』10/12, 1968, 7.
- 「アジア民族芸能祭」『民俗芸能 秋季号』34, 1968, 57-58.
- 「アジア民俗芸能祭をめぐって」『民俗芸能』35, 1969, 73-78.
- 「アジア民族芸能祭」『季刊邦楽』4, 1975, 94-95.
- 「今年度芸術祭の成果『アジア民族芸能祭』盛会のうちに終了」『文化庁月報』1, 1976, 3.
- 「手拍子はずむ第三回日本民謡まつり 九月二十一・二十二日、於国立劇場」『文化庁月報』11/134, 1979, 16-17.
- 「第三回日本民謡まつりの開催」『文化庁月報』8/131, 1979, 20.

- 「芸術祭40周年・放送開始60周年記念 アジア民族芸能祭」『文化庁月報』10/205, 1985, 8.  
「バリ島プリアタン歌舞団の初来日」『月刊インドネシア』451, 日本インドネシア協会, 1985, 1.  
「ガムラン [楽舞夢幻]」『音楽芸術』41/1, 音楽之友社, 1983, 5-12.  
「プリアタン歌舞団」『ラティーナ』381, 1985, 30.  
「インドネシア仮面芸能団体スアール・アグン芸術団招聘 招聘事業報告書」岩手県, 1994.

#### [公演プログラム・パンフレット]

- 「明治百年記念芸術祭特別公演 アジア民族芸能祭」1968.  
「EXPO'70 日本万国博覧会 下巻」国際情報社、1970.  
「芸術祭30周年記念事業・NHK 放送開始50周年記念 アジア民族芸能祭」1975.  
「アジア伝統芸能の交流」1976.  
「文化庁主催・芸術祭特別公演 第3回日本民謡まつり」1979.  
「ガムラン『楽舞夢幻』」国際交流基金、1982.  
「芸術祭40周年・放送開始60周年 アジア民族芸能祭」1985.  
「バリ島プリアタン歌舞団 日本公演プログラム」財団法人日本文化財団、1985.  
「こどもの城オープニング記念 ジャワの舞踊劇とガムラン 英雄ダマル・ウラン物語」こどもの城、1985.  
「こどもの城開館1周年記念ガムラン金香花頌」1986.  
「芸術の島・バリ」ツルモトルーム、1986.  
「バリ島プリアタン タガス・グヌン・ジャティ歌舞団+サルドノ+YAS-KAZ 日本公演」1987.  
「昭和六三年度芸術祭主催公演・第12回日本民謡まつり アジア・太平洋うたとおどりの祭典」1988.  
「バリ島プリアタン歌舞団 ティルタ・サリ 超絶のガムラン」株式会社アクション・リサーチ、1988.  
「バリ島・タガス グヌン・ジャティ歌舞団公演」1989.  
「超絶のガムラン バリ島プリアタン歌舞団 ティルタ・サリ日本公演」株式会社アクション・リサーチ、1990.  
「バリ島・タガス グヌン・ジャティ歌舞団ケチャ公演」1990.  
「インドネシア仮面舞踊劇トペン・マドゥラ」国際交流基金アセアン文化センター、1991.  
「'91インドネシア共和国観光年 バリ島・タガス グヌン・ジャティ歌舞団公演」1991.  
「東南アジア祭'92」東南アジア祭'92実行委員会、1992.  
「大垣ルネッサンス『代々の雅』」1992.  
「バリ島[スマララティ歌舞団]92年公演プログラム」1992.  
「PURI SARASWATI DANCE&MUSIC IN BALI」1993.  
「'93シルクロードプレゼンツ Vol.6 バリ島ブレレン・テジャクラ歌舞団公演」1993.  
「楽舞悠久 ジャワ宮廷ガムラン・舞踊の精華」音工場 HANEDA、1994.  
「体の中にとけてくる。ガムラン・メッセージ」1994.

- 「インドネシア共和国建国50周年記念 ソロ・スロカルト王家のガムランと舞踊 クラトンの夢と伝説」財団法人ニッセイ文化振興財団、1995.
- 「第3回日生劇場国際児童フェスティバル バリ島のこどもの踊りとガムラン」1995.
- 「バリ島スマラ・ラティ歌舞団日本公演'96 桜の花とともに」1996.
- 「超絶のガムラン ヤマサリ日本公演'96」株式会社アクション・リサーチ、1996.
- 「ジャワ・スロカルト王家のガムランと舞踊 青銅の馨・花の響」在日本インドネシア音楽舞踊協会、1997.
- 「インドネシア・日本友好祭'97 バリ島ダルマ・サンティ舞踊団公演 神秘と壮麗のガムラン」チプタ・ブダヤ・バリ財団日本代表部、1997.
- 「絢爛のスーパーガムラン バリ島ヤマサリ日本公演」チプタ・ブダヤ・バリ財団日本代表部、1998.
- 「インドネシア舞踊公演 旅する舞人～伝統から現代へ～」国際交流基金アジアセンター、1999.
- 「朝日新聞創刊百二十周年記念公演 アジアの風」朝日新聞東京本社、1999.
- 「平成14年度舞台芸術国際フェスティバル 音楽も今アジアから 胡弓で結ぶアジアの音楽」国立劇場、2002.
- 「西ジャワの歌の華 古典歌曲トウンバン・スنداを聴く・2」バリ芸能研究会、2003.
- 「幻のバリ舞踊とガムラン ジョゲッ・ピンギタン」バリ芸能研究会、2008.
- 「サスミント・マルドウォ舞踊団(ジャワ)、カルティカ&クスモ(日本)合同公演 ジャワ・舞踊とガムランの宇宙」カルティカ&クスモ、2009.

#### [公演チラシ]

- 「ワヤン・クリ ジャワの影絵とガムラン 光影夢幻」1984
- 「ガムラン 香る花たちの瞑舞」1984.
- 「異界の仮面神戯 バリの仮面劇トペン・パジェガン」1986.
- 「'92アセアンイヤー バリ島タガス グヌンジャティ歌舞団公演」1992.
- 「大垣ルネッサンス『代々の雅』」1992.
- 「神秘楽劇 神技百人 ケチャ日本公演'94 人類究極のパフォーマンス プリアタン・バリ」1994.
- 「小泉文夫記念音楽会 アジアの響き」1994.
- 「国立劇場7月特別企画公演 胡弓II」1995.
- 「アジアの風 瞑想のガムラン ジャワ宮廷音楽の昇華／ジャワのワヤン・クリ 影絵とガムランによる民族の神話」1999.
- 「ジャワ・ガムラン～精霊の楽舞～」2000.

#### [インターネット]

- えずこホール タガス・グヌン・ジャティ歌舞団公演 (2019年8月28日アクセス)  
<http://www.ezuko.com/archives/archive1997.html>
- 平成16年度第2回おかやま県民文化祭総覧 (2019年8月28日アクセス)  
<http://www.pref.okayama.jp/uploaded/attachment/134420.pdf>

2009/5/3 広島フラワーフェスティバル (2019年8月28日アクセス)  
<https://ameblo.jp/hiff/day-20090503.html>